

涇川の石窟寺

——北魏の南石窟寺碑について——

八木宣諦

中国北方には四世紀以後、石窟寺が開窟されて北魏に最も盛んとなり、唐宋元迄続けられたものもあつて、全体で三十ヶ所程が確認され、仏教文化の東漸する姿の象徴であると云われている。地理的環境、時代性を背景として各々独自の石窟寺造営がなされた。涼州仏教の勢力下に開窟された石窟寺造営も二つのルートに進んだとされ、一は雲岡から義県万仏洞へのコース、他一は南ルートで涇州窟、邠県水簾洞などのコースと渭水の上流に沿つて麦積山石窟、長安に至るコース、主ルートは、皇帝勅願になる雲岡より竜門、鞏県に至る石窟とされている。しかし、各石窟間の相互関係はあまり究明されていない。そこで、竜門石窟と関連づけて、南石窟寺碑を手がかりとして甘肅省涇川の石窟寺について考察を進めて行きたい。

此碑は、北魏永平三（五一〇）年使持節都督涇州諸軍事平西將軍、涇州刺史安武県開国男奚康生造とあり、孝文・宣武帝時代に北方で活躍した奚康生が建てたものである。

偶、この近く慶陽寺溝より永平二（五〇九）年の石窟が発見され報告がなされた。^①一九五九年甘肅省博物館の発掘で、慶陽県西峰鎮西北四十里、涇水の支流の蒲河に沿つての紅砂岩上に南北一一〇m 高さ一四mに亘つて、六窟、仏龕二八〇、仏像二二〇〇体と云う。

中心の第一六五窟には、高さ八mの七尊像が立てられた写真が紹介されていて、大規模な石窟寺造営が行われたことが知られる。隋唐に亘つて開鑿が続けられたというが、銘文等は見られない。「鎮原県志」には、奚康生の建てた北石窟寺であると記載している。

造窟主の奚康生の伝を「魏書」卷七十二、「北史」卷三七に見ると、性驍勇にして武芸あり、蠕蠕（柔然）が頻りに入寇するので、太和十一年、柔玄鎮都將の李兜に従つて前驅軍主となり大いに討撃し、宗子隊主となつた。その他歴戦の功が記され、撫軍大將軍、南青州、華州、涇州、相州諸刺史を歴任して、涇州に在任した時造つたのが南北石窟寺であつた。伝に

多殺戮而信向仏道、数捨其居宅、以立寺塔凡歷四州、皆有建置……於南山立仏図三層

と、歴任の諸地に寺を造つて、涇川に三層浮図を建て、南石窟寺碑を建てたのである。

碑拓は下段が欠け、「中国文化史蹟」等に記載するが、著録するもの少く、范寿銘は、石窟寺主僧斌、南石窟寺碑と凹凸二段に題額が為され、二三行毎行三三字、碑陰に三段に寄進者五六名を刻すという。碑文は、石窟寺、仏塔を建置したいわれを記した造寺碑の類であるが、竜門風の転折の応用など、筆法の面からは竜門造像記の系統を引き碑形を以て造られたものと考えられる。

竜門石窟に於ける北魏年代の造像記は、その内容から、①洛陽の支配階級の北魏宗室並びに貴族の造像記。②貴族始め民間での仏教信仰の指導者（僧尼）の造像記。③上記により指導教化された集団による造像記の三類に分けられている。^{②③}初期の個人的な造像、造龍が行われたのに続いて、景明三年より、孫秋生二百人等造像記を始

めとする団体（邑）による造像が盛んになる。南石窟寺碑が建てられたのは、古陽洞でいえば第二次造成の時期に当る。北魏時代の僧侶が、民間に巡教して信仰団体を結成し、その指導者として仏教を説き、その信仰を勧め、造寺、造像、写経等の功德の業を勸化したものと云え、北魏造像記中には僧尼の発願によるものが七二例もあることによつて盛んであつたことが知られる。南石窟寺碑は、これらの影響をうけて洛陽以外の地に建てられた例であらう。

僧賦を教化の指導者として、奚康生が造窟主となつて団体の協力によつて為されたものである。碑陰には、寧遠、扶風、略陽、天水、昌黎等の地の人々が名を列ねている。碑には、

皇帝陛下、聖製潛通、応期纂曆、道氣籠三才之経、至德蓋五常之緯、……五教遐融、礼風遠制、慈導開章、真宗顯誥（中略）、遂尋案経教、追訪法図、冥福起於顯誓、鴻報発於涓心、悟尋訓旨（中略）、廻往幽衢、沈淪邪或、聖覺匪運、真図詎測、至哉大覺、持暢靈姿。

と仏教知識の語はあまり使わないが、武將奚康生が、皇恩に奉じて仏堂を建てて仏法の道を追訪して正覚に致らんことを願つている。書風、筆法の面から此碑がどういう位置にあるか考えて見たい。当時中原の書風が、中岳崇高靈廟碑の如く、右肩を上げず、隸書を基本にして転折を翻えさず終筆や下方に重心を置いた楷書である。一部には暉福寺碑（四八八）のように、後の楷書に一步近づいたものも出て来ている。そのような中で、太和末年から、起筆を鋭くして転折を翻した斬新な方筆楷書が竜門に現出する。文字の方は、延昌（五一二）以后になるとくずれて行くが、「洛陽伽藍記」に示す如く、洛陽寺院がその前の倍以上一三七二七寺に増加したことは、都

涇川の石窟寺（八 木）

市の堂塔伽藍仏教へ移行して行つた背景があるうかと推察される。

南石窟寺碑は、このような書風背景の中で、基本的には中岳崇高靈廟碑のような隸意を失わない楷書に、意趣的には直前に流行し始めた竜門造像記の筆法を加味したものといえ、茂密した結構できびしい筆致が見られるのは同時代の大般涅槃経卷十五や馬鳴寺根法師碑などに相通するものがある。

奚康生が碑として建てたことは、その事蹟を永遠に残そうとしたので、古法を重んじ莊嚴な趣きの旧派の隸意を含んだ楷書を基としたことが知られよう。

太和十九年より正光二年（四九五～五二一）迄の竜門造像記は全て古陽洞にあり、多くの個人的な造像、造窟が行われたことを示し、洛陽地方に於ける上層階級の仏教信仰の姿が推察できるのであるが、南石窟寺碑銘文を通して、甘肅省涇川の辺鄙な土地にも、北魏武人を造像主とする石窟寺が行われたことがわかる。

北中国各地に、石窟を中心として信仰団体があつたことの推定できる資料でもある。

- 1 「現代仏学」一九六三年一期。「文物」一九六三年七期。
- 2 「循園金石文字跋尾」卷二。
- 3 水野清一・長尾敏雄「竜門石窟の研究」。
- 4 この他炳靈寺石窟に延昌二年曹子元造窟題記、義泉万仏洞に太和二三年の元景造石窟記と景明三年の韓貞等七四人造像記が見られる。

（大正大学総合仏教研究所研究員）